

はじめに一なぜ、音と音楽の価値なのか—

現代は、CD やポータブルプレーヤーの普及で自分の嗜好に合った音楽を選び、楽しむだけでなく、パソコンで音楽ソフトを使って気軽に作曲をしたり、動画ソフトなどを使ってネットで不特定多数と批評し合ったりと、音楽を介して人とつながりやすい環境にある。一方で、生活の中に音が溢れているために、音や音楽に対して無頓着にならざるを得ない環境が当たり前になっているとも言える。じっくりと音に向き合い、音環境を整えて生活を豊かにデザインしようとする意識は大人にも少ないのではないか。

目の前の生徒も、同様の環境に置かれているためか、音楽を手軽に楽しむ環境ではあるものの、自らの嗜好に凝り固まり、音楽の多様性やその響きを丁寧に味わう機会は少ないように見える。また、生活の中で楽しむ音楽と、音楽の授業で学習する教材との結び付きが分からず、授業での学びを生活に生かしていない生徒も多くいる。

そこで、義務教育における音楽科の学習の中に、生活の中のさまざまな音や音楽に気付き、多様な価値観を理解し、自ら批評する力を付ける活動を取り入れることで、子ども達の「聴く力」を高め、より豊かな生活へとつなげることができないのではないかと考えた（下線部は名塚による、以下同じ）。

1 研究の目的と方法

新学習指導要領解説音楽編(2017)には、「小学校、中学校及び高等学校を通じた音楽科の課題」として、「感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり、音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくこと、我が国や郷土の伝統音楽に親しみ、よさを一層味わえるようにしていくこと、生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての関心や理解を深めていくことについては、更なる充実が求められる」と示している。

筆者は、学校教育における音楽教育の固有性として、児童生徒の豊かな情操の育成と生きる上での自分なりの自己表現方法の獲得にあると考える。中学校での音楽の授業に、生活の中のさまざまな音や音楽に気付く

活動を取り入れることは、生徒に新しい感動のきっかけを与えることになるだろう。また、音や言葉を通して感動を共有することで、音楽の楽しさや美しさに気付き、音や音楽のある生活の価値を見出すことにつながっていくだろう。

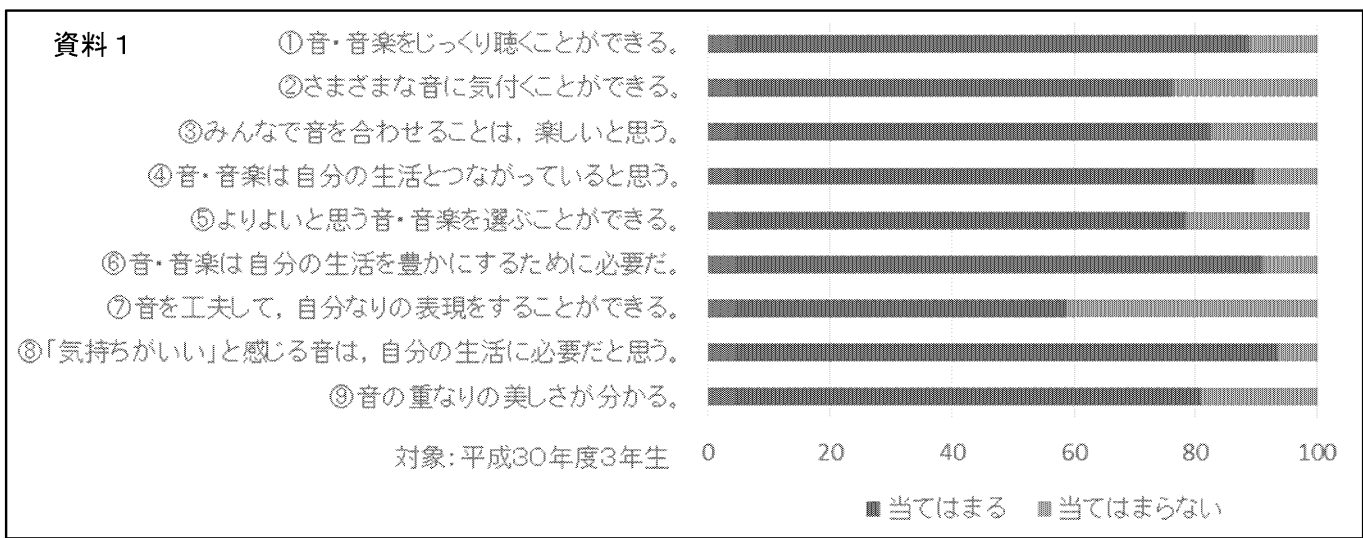
しかし、音楽における「楽しい」や「美しい」は感覚的なところも大きく、個人差もあるため、教師はさまざまな音や音楽を提供し、生徒に多角的に捉えさせる必要がある。具体的には、身近な音や音楽に改めて耳を傾けたり、今までの音や音楽の概念を広げるような活動を取り入れたりとすることで、自らの音環境に気付ききっかけが生まれ、音や音楽に対する自分なりの意味付けを通して、解釈・評価をすることは、自らの音環境を見直すことだけでなく、自己理解にもつながっていくのではないだろうか。

2 アンケートから見られる本校生徒の実態

研究を進めるにあたり、6件法と記述式によるアンケートを行った。所属する中学校の生徒の実態を分析し、それを基に行った実践を検証することで、より生徒の実態に即した授業開発を目指した。対象は実践を行う本校の全生徒 241 名である。アンケート項目は、研究する上での視点となるものから、大きく分けて「三つの柱に関わる内容」「協働の価値」「批評力」「自らの音環境への気付き」を問うものとした。

資料1は、3年生の6件法アンケートの結果である。思考力や表現力の活用の仕方に自信がもてず、「音楽的な見方・考え方」が、適切、且つ十分に働いていないことが読み取れる。この傾向は三学年すべてに見られた。このことから、本校の生徒は音や音楽の深い魅力にはまだ十分に出会っていないとは言えないことが分かった。記述式のアンケートにも、「見本(例)」というものがあるから、それで固定され、そうじゃないといけないと思い、できないから」などと、自覚している音環境の狭さから、自分なりに工夫することへの難しさを感じている生徒が多くいることが分かった。

3 学習指導要領の改訂内容と本研究実践—目標、見方、考え方、生活—



※「とてもそう思う」「そう思う」「少しそう思う」を「当てはまる」でまとめ、「あまりそうは思わない」「そう思わない」「まったくそう思わない」は「当てはまらない」にまとめた。

中学校学習指導要領の改訂に伴い、中学校学習指導要領解説音楽編には、音楽科の目標として「音楽的な見方・考え方を働かせた学習活動によって、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを目指す」と明記された。また、「音楽的な見方・考え方」とは、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること」と定義されている。

さらに、資質・能力を育成するためには、「音楽科の学習が、その後の学習や生活とどのように関わり、どのような意味や価値をもつのかといったことに生徒が意識を向けることのできる場面を、指導の過程に適切に位置付けるなどの工夫が必要である。このことは、学校における音楽科の学習の有用性を認識することにもつながっていく。」とも示されている。

4 関係諸理論・先行研究から見る本研究の意義

(1) サウンドスケープ・デザイン

R. マリー・シェーファー（カナダ、1933-）は、「音楽」や「騒音」によって捉えることのできないさまざまな音をすくい上げる枠組みとして「サウンドスケープ（音環境）」¹という概念を提唱した。シェーファー(1986)は、そのサウンドスケープの美的な質を改善するためには、音を想像力豊かに配置して、魅力的で刺激的な音環境を未来にむけて創造する「サウンドスケープ・デザイン」が大切であると述べている。このことから、自分の周りの音をより深い批評力と注意力をもって聴くことにより、豊かな世界を拓ききっかけを得て、義務教育後の豊かな人生へとつながりが

生まれると考えられる。

(2) サウンド・エデュケーション

このサウンドスケープの概念を教育に落とし込んだのが、「サウンド・エデュケーション」である。日本サウンドスケープ協会によると、サウンド・エデュケーションは「サウンドスケープの考え方にに基づき、身近な環境に耳を傾けるための『聴く技術』の回復と育成のために開発された教育活動の総称である」と説明している。シェーファーはこのサウンド・エデュケーションを実現するために、音をより良く聴くためのワークである、「サウンド・ワーク」をまとめた課題集を発表している。これらの課題は、自分の周りの音をより深い批評力と注意力をもって聴く力の育成を目指している。日本では、子どもたちの感性の高まりをねらって、幼児教育に取り入れた実践が発表されている。

(3) モジュール学習

現行指導要領では、自然音や環境音と音楽のかかわりを意識することで、音や音楽への興味・関心を養うことが目標として挙げられていたが、音環境の学習が単元構想の中心になっていたり、中学三年間で積み上げる、育むべき力の一つとして構成されていたりする年間計画は見たことがない。このことから、既存の学習内容を改変することなく、系統的に音環境について考えることのできるカリキュラムが必要である。

愛知教育大学附属名古屋小学校では、曲想にふさわしい表現に必要な技能を高める工夫として、モジュール学習を取り入れている。実践の検証を通して、新山王(2017)は「限られた授業時数の中で効率よく『音楽に関わる知識・技能』を習得させる一方策として極めて有効である」と述べており、本研究においても、モ

¹視覚的な風景を意味するランドスケープという言葉からの造語である。地球上のさまざまな時代や地域の人々が、音の世界を通じて自分たちの環境とどのように関係しているのか、どのような音を聞き取り、そこからどのような情報等を得ているのかを問題としている。

ジュール学習は有効な手段になり得ると考えた。

(4) パフォーマンス課題

石井(2015)は、現代社会をよりよく生きるために必要な資質・能力を保障するために、「使える」レベルの学力・学習を追求するカリキュラムの必要性を述べている。また、求められる学力・学習を評価する有効な方法として、「パフォーマンス評価」を挙げている。音楽科においては、時間芸術という音楽の特性から、これまでも演奏や創作表現を評価することは多かった。しかしながら、その評価規準は教師の判断に依存するところが大きく、信頼性が十分とは言えない。このように、パフォーマンス課題への学習者の取り組みには、多様性や幅が生じるという課題がある。その課題を解決するために示されているのが「ルーブリック」と呼ばれる、パフォーマンスの質を評価する評価基準表(成功の度合いを示す三～五段階の尺度と、それぞれの段階に見られる認識や行為の質的特徴を示した記述語から成る)である。また、「使える」レベルの思考を求めるパフォーマンス課題は、毎時間ではなく重点単元や学期の節目で折に触れて取り組むことが有効(石井, 2015)という点から、本研究ではモジュール学習で育成された思考のプロセスを表現できるようなパフォーマンス課題を重点単元として設計し、ルーブリックを検討することとした。

学習指導要領改訂の基本方針として、「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニング)の実現に向けた授業改善が示されている。中学校学習指導要領解説音楽編には、教科の特性に則って「主体的・協働的で深い学び」とあり、「協働的」については、「合唱や合奏などにおける『共同』に留まらず、表現及び鑑賞の学習において、生徒一人一人が自らの考えを他者と交流したり、互いの気づきを共有し、感じ取ったことなどに共感したりしながら個々の学びを深め、音楽表現を生み出したり音楽を評価してよさや美しさを味わって聴いたりできるようにすることを重視し、協働的とした。」と解説してある。これを踏まえ、本研究では、サウンド・ワークや演奏表現など、音や音楽を通しての学びや、話し合い活動や自己評価を通しての学びを「主体的・協働的な学び」とする。

音楽科の授業において、自らの音環境を見つめるような学習活動だけではなく、先人の音楽家がきっちり構成した作品から、作曲者の意図を考えたり、発声や奏法の工夫を試行錯誤したりすることで、知識や技能を身に付けることも、自己表現方法を身に付けるための大切な学習活動である。音楽はそのときの人や空間が大きな影響を与えるという特性をもっていることから、互いに聴き合いながら協働的に音を発し、共に音楽を奏でる体験をすることで、生徒の情操をより高め、自己を表現する楽しさの実感や、興味・関心を高めるための素地の育成が期待できるだろう。

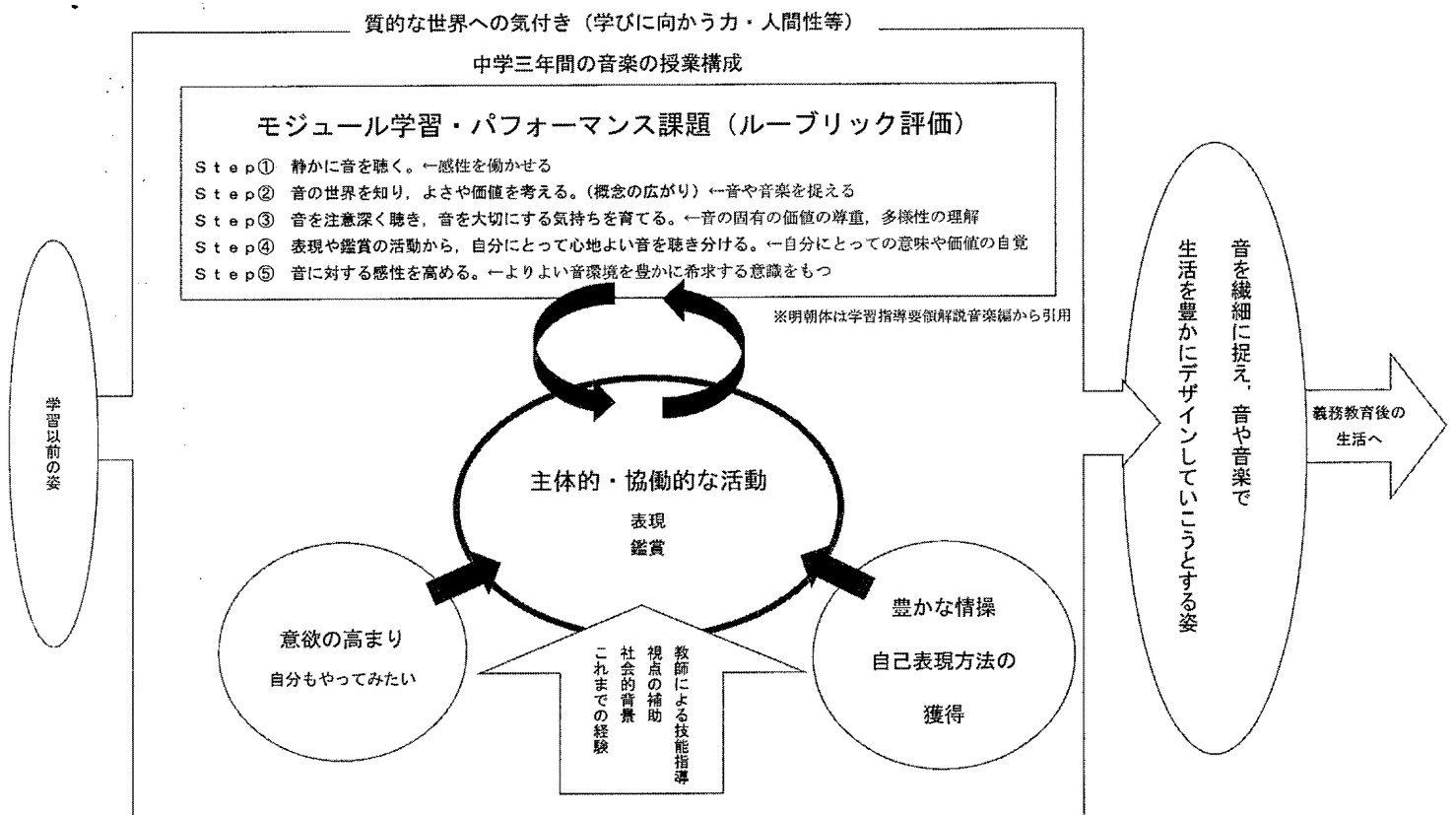
以上の内容を踏まえた研究構想図を資料2として示

5 研究実践の構想と方法

(1) 主体的・協働的に音環境を見つめる

資料2

音や音楽の価値の理解から、生活を深める音楽科授業開発(中学校)



めざす姿：生活の中の音や音楽に気づき、表現活動や鑑賞活動に生かすことができる生徒
平成30年度 (音楽)科 (1)年

月	4月				5月				6月				7月				8月				9月				10月				11月				12月				1月				2月				3月															
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45															
モジュール学習	目標 身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)																			
活動内容	耳をすましてみよう				身体の中の音を聴く				用紙を折って音を聴く				ふでばこゲーム				紙を楽器にする				しりとりに作曲				「小さな祭り」合奏				イスとり作曲				音と一緒に走る				音をもち続ける				なんちゃって祭り				バー・コングレ				4分33秒				水の曲				音のスケッチ			
単元	シオリエンテー				織り歌				しりとり				取歌				郷土の民謡				声部				音				なんちゃって祭り				和楽器				卒業				曲																			
学習内容	歌				ミダ				ソダ				地域の伝統音楽				練習				能				和楽器				卒業				ル																											

めざす姿：さまざまな音や音楽を、自分の価値観と照らし合わせて解釈・評価することができる生徒
平成30年度 (音楽)科 (2)年

月	4月				5月				6月				7月				8月				9月				10月				11月				12月				1月				2月				3月			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45			
モジュール学習	目標 身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)							
活動内容	耳をすましてみよう				音に				マリ				なん				日本				名前				音				「環				音				絵											
単元	シオリエンテー				う				う				の				く				現				な				し				て				か											
学習内容	授				レ				短				ル				ギ				ス				「				卒				ダ				展											

めざす姿：音を繊細に捉え、音や音楽で生活を豊かにデザインしていこうとする生徒
平成30年度 (音楽)科 (3)年

月	4月				5月				6月				7月				8月				9月				10月				11月				12月				1月				2月				3月			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45			
モジュール学習	目標 身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)				身近な音を注意深く聴く。(1)							
活動内容	耳をすましてみよう				隣				手				「				「				「				「				「				「				「				「							
単元	オリエンテー				味				り				深				混				芸				工				生				言															
学習内容	授				演				「				練				合				音				合				卒				卒															

Step① 静かに音を聴く。←感性の働き
 Step② 音の世界を知る。(概念の広がり)←よさや価値を考える
 Step③ 音を注意深く聴き、音を大切に育てる。←音の固有の価値の尊重、多様性の理解
 Step④ 表現や鑑賞の活動から、自分にとって心地よい音を聴き分ける。←自分にとっての意味や価値(自覚)
 Step⑤ 音に対する感性を高める。←豊かな感性

※明朝体は新学習指導要領解説音楽編から引用

す。
(2) モジュール学習の活用法と位置付け(カリキュラム・マネジメント)

本研究で目指すモジュール学習は、主体的・協働的²⁾に音環境を見つめるための音の見つけ方や、自分なりの音楽の概念を見直すきっかけが生まれるような時間

を確保することで、音や音楽の価値を理解し、生活の中のを豊かにデザインするための資質を向上させたり、能力を身に付けさせたりするための短時間学習である。モジュール学習の年間計画を作成する上では、活動内容を5つのステップに分類することで、中学校三年間での積み上げができるように留意した。また、

²⁾本研究では、5(1)を踏まえ、「主体的・協働的」に対話的な学びも含むこととする。

同様の活動でも学年に合わせて内容を変化させたり、授業の本活動に関連させて時期を設定したりするようにして、学校の音楽教育にも組み込むようにした。

各学年のモジュール学習の活動計画においては、より実用度を高めるために、学習の流れを大まかに三段階とし、最終段階にその活動においての目指すべき姿を示した。資料3が、モジュール学習を組み込んだ各学年の年間計画案である。

(3) ルーブリック開発による“質的に深い”学びの見取りと評価・育成

資料4として、3年生2学期末に設定しているパフォーマンス課題を評価するためのルーブリック表を示す。評価基準は、教育課程部会芸術WGの資料を基に作成した。

中段が資料の文言、上段が課題に対する学びの質的な深まりを評価するための観点である。これらを踏まえ、ルーブリックの信頼度をより高めることを目指して、評価レベルの下段には、思考や能力の熟達化を判断するための水準を明記し、生徒の認識や行為の質的特徴を見取りやすくした。評価項目の1は「個別の知

識や技能」、項目2・3・4は「思考力・判断力・表現力等」、項目5・6は「学びに向かう力、人間性等」の質を示していることから、パフォーマンス課題に対して、「思考力・判断力・表現力等」の質をより深く評価できるものと言える。この項目の割合は、パフォーマンス課題によって変移させることで、評価する資質・能力の思考過程をより丁寧に見取ることができる。

これらの基準を満たす度合いを5レベルで示し、学びの深まりの特徴を記述語で表した。下から、「気付く」「解釈・評価する」「親しむ」「活動や鑑賞に生かす」「他者と協働することで豊かに楽しむ」と段階の違いを表してある。

6 授業実践

(1) 実践の計画（平成30年度）

今回の検証では特に、3年生に設計した重点単元の実践を取り上げる（資料5参照）。本単元は、身近な自然の音に耳を傾け、音の固有の価値を知り、文化や歴史の視点から音の世界を見直すことで、そのよさや価値についての考えをもてる生徒の育成を目指している。

資料4

ルーブリック開発による“質的に深い”学びの見取りと評価・育成（名塚試案、2018年11月）

評価レベル	中学校音楽科における学びのルーブリック・モジュール学習の活用による評価基準（規準）試案 －「環楽器」紹介活動を通じた資質・能力育成の課題把握と評価基準－5レベル・6項目－					
	1 音楽の多様性と背景の理解	2 音や声による自分のイメージの表現	3 音環境をよくするための創意工夫、音楽表現の創造	4 音環境の解釈・評価、自らの意志の選択	5 協働的に楽しむ、音や音楽のある生活への親しみ	6 人間にとっての音や音楽の存在意義、よりよい音環境の希求
	・我が国の音楽文化に委着をもつとともに、諸外国の音楽文化を尊重する態度	・自分の思いや意図を生かして音楽表現をするために必要な技能	・知識や技能を活用した音楽表現の創造に関する能力	・感受した特質や雰囲気批評する能力	・協働して音楽活動をする喜び	・音環境への関心
	音や音楽に対する、概念の広がりが分かる記述がある。	発表内で、言葉と音を組み合わせ紹介している。	1つの環楽器で2種類以上の音を紹介したり、その環楽器の特性を音の比較で紹介したりしている。	環楽器から生まれる音色を感受し、言語化したりしてその良さを伝えることができる。	アンサンブルを環楽器の魅力の一部として紹介・実演する。	これからの生活に学びを生かそうとする発言や記述がある。
S(5)	音や音楽を自らの生活に結び付け、解釈・評価し、選択することで、演奏活動や音楽鑑賞等に生かし、他者と協働し、豊かに音を楽しむことができる。（意味や価値の自覚と表現） 5～6項目					
A(4)	音や音楽を自らの生活に結び付け、解釈・評価し、演奏活動や音楽鑑賞等に生かそうとすることができる。（意味や価値の自覚、意欲） 4項目					
B+(3)	音や音楽を自らの生活に結び付け、解釈・評価し、演奏活動や音楽鑑賞等に親しむことができる。（意味や価値の自覚） 3項目					
B-(2)	音や音楽を自らの生活に結び付け、解釈・評価することができる。 2項目					
C(1)	生活の中の音や音楽に気付くことができる。 1項目					
D(0)	音や音楽に無関心である。					

めざす姿：音を繊細に捉え、音や音楽で生活を豊かにデザインしていこうとする生徒

資料5

月	4月			5月			6月			7月			9月			10月			11月			12月			1月			2月			3月				
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
モジュール学習	目標		身近な音を注意深く聴く。(①)			徐々に変化するグラデーション音楽を体験する。(④)			日本の音環境(③)			日本の音の楽しみ方(②)			ゲーム音楽について考える。(②)			身近な楽器を見つける。(②)			循環コードとアドリブを体験する。(④)			人生における音の意味を考える。(⑤)			自分の音環境について(⑥)								
	活動内容		耳をすましてみよう 階段の音を聴く 音のかくれんぼ			手拍子の Rond			日本の音風景百選			「風鈴」「水琴窟」			「ドラゴンクエスト」「風のリグレット」			「環楽器」を探す			「6つのコード」			聖ヨハネホスピス			「音日記」をつくらう								
単元	シオリンテー		味曲歌わ想詞つこのて変内化容をや			り曲音を想楽の解の構し閑造てわと						深混ま声り合唱の						芸郷能士の民謡や			工音夫楽しので構成を						生曲言か想楽しをの特性や								
学習内容	授業の進め方		演「花」 奏「ダト」 の			「ボレロ」						練ク合習！ 唱ルコ のン						音さとく 楽まもら ざにし まあと なる			合「ダト」 奏「リ」						卒業の歌								

また、自らの音環境を協働的に表現するパフォーマンス課題に取り組むことで、学習をまとめる構成となっている。本来は1・2年生のモジュール学習との系統性を組み込んで設定している内容であるが、平成30年度の3年生には学びの積み上げがないため、今後、継続して実践を行うことで改めて実際の効果を検証していく。

また、各活動のまとめのなかに「自分チェック」というメタ認知的な活動の振り返りを行うこととした。これは、生徒が学びをモニタリングすることで、教師と生徒の間で目標・評価基準を共有するだけでなく、生徒自身が学習状況を把握し、次の学びへつなげていくことをねらった。(資料6参照)

資料6

<自分チェック> A: そう思う B: まあまあ C: 分からない

・ 奏したい音をイメージして、環楽器の演奏方法を工夫した。	A	B	C
・ 環楽器の見つけ方や、独特な音色を出すためのさまざまな演奏方法が分かった。	A	B	C
・ 環楽器を使って、イメージ通りの音を出すことができた。	A	B	C

1学期末のアンケート結果を分析してみると、「音を工夫して、自分なりの表現をすることができる」という項目において、大幅な増加が見られた。また、記述回答にも「音楽の授業でやったので、自分から意識してできるようになったから」「上手に表現することは苦手だけど、そうなれるようにがんばれたから」などの苦手意識が薄くなったという意見や、「授業でやったときに、手拍子や声だけでも音楽がつかれると知ったから」という、音楽の概念の変化が見られた意見もあった。

その一方、『気持ちがいい』と感じる音は、自分の生活に必要なと思う」という質問に対して、「当てはまる」と答えた生徒は大きく減少した。しかし、「あなたの生活を豊かにしている音・音楽は何か」という質問に対しての記述回答に着目してみると、実践前には生活音・自然音を記述していた生徒が96名中8名に留まっていたが、実践後には31名へと増加した。このデータから、無意識下にあった音や音楽を意識できる耳が、実践を通して育ったことにより、自分にとっての騒音や不快な音までも意識するようになったのだと考えることができる。身の周りに音があふれていると気付くことは、自らの音環境を意識する大きな一歩になると言えるだろう。また、常に音や音楽を繊細に捉え、いつでも記憶の中から引っ張り出せるようになっていることも成果の一つと言えるだろう。

(2) モジュール活動①「日本の音環境」

「素敵だな」と思う景色を写真で記録し、紹介することは多いが、「素敵だな」と思う音を採録し、共有しようとする人は少ない。そのため、音は消えやすく、消えたことにすら気付かない人も多い。そこで、環境庁が1996年に選定した「日本の音風景百選」を紹介

することで、それまでのモジュール活動で気付いた、「その土地の音の固有性」についての概念をさらに広げ、音楽ではなく、音を楽しむ文化の魅力に気付かせることをねらい、本モジュール活動を設定した。

愛知県の音風景二選を鑑賞した後、地元の音風景を振り返り、その価値を改めて実感させることをねらいとして、長期休業を活用して、季節ならではの音風景を見つけられるような課題を出した。2学期始めに、夏休みの間に見つけた、その季節ならではの地元の音風景を紹介させ、「身近な生活の中にある固有の音風景」への関心を高揚させた。

地元の音風景への気付きには、2割程度の生徒が地元特有の具体的な音を取り上げていた。分類してみると、「地元の民謡や祭りばやしなどの文化的な音」「季節や今昔での音の変化」「行事や家族との思い出に関わる音」に分けられた。また、以前校区で騒音問題として取り上げられていた「飛行機の音」を取り上げたのが1人しかいなかったことは意外だった。無意識下の音になっているのだと推測できる。「自分チェック」では、「各地の音のよさを感じながら鑑賞できた」と感じた生徒が80%、「そこにしかない音の大切さが味わえた」と感じた生徒が72%だった。

(3) モジュール活動②「日本の音の楽しみ方」

日本人とポリネシア人にもみ見られると言われている聴覚の特性や、そこから生まれた日本ならではの音を楽しむ文化について知り、国や地域によって異なる音環境の多様性に気付かせる。

鑑賞後の記述には、「外国の人が聴こえない音を『春だな』とか『きれい』だと思えるのはとてもいい。確かに、小学校で習った歌に、鳥の声が入っていたものが結構あった気がする」「日本人は生活を豊かにしていくために、自然の音を生かして歌や詩をつくっていったのだと思う」「日本と外国で環境が違うだけで、音の捉え方や感じ方が変わってくることに驚いた。私は洋楽の方は好きだけど、リズムが頭に残るのは曲の作り方の違いからだったと分かった」と、音環境の違いから生まれる文化の違いに気付いたことが読み取れた。

「自分チェック」では、「日本人の生活と音の独特な結び付きが分かった」と、理解を実感できた生徒が78%に達したが、思考を伴って鑑賞ができたと答えた生徒は6割に留まった。このことから、より専門的な内容においては、頭では理解できたと感じても、その知識を音楽活動に活用することに対して難しさを感じている実態が明らかになった。

(4) モジュール活動③「ゲーム音楽について考える」

プログラマーがたった三トラックの電子音で制作したゲームの音が話題となったことで、専門職としてサウンドクリエイターが確立されるなど、さまざまな試行錯誤を経て現在の生演奏に近いゲーム音楽になるまでの過程を知り、日頃親しんでいる音楽への価値観を

高めることをねらった。また、音のみで構成されるゲームについて知ることで、音がもつ情報の多彩さや、社会において人々が生活を豊かにするための一つのツールとして成立していることに気付かせたいと考えた。

鑑賞後の記述には、「音のパート数によって、イメージや立体感が変化し、今のゲームの音になるとよりリアル感が増して、技術の進歩をより実感した」「1～3音でも音楽がないと寂しい感じがしたので、音楽の力は大きいと感じた」「時代が新しくなるたびに音楽が進化していることが分かった」などと、音が人々の生活を豊かにしていると実感している様子が読み取れた。

「ゲーム音楽の特徴を捉え、そのよさを味わったり、価値を考えたりすることができた」「音の重なりによる変化を聴き取り、成り立ちを理解できた」の二項目で振り返った「自分チェック」では、達成感が実感できた生徒が6割程度に留まったものの、「ゲームをするときにはBGMにも耳を澄ませてみたい」「ノイズ音ってどうやって出すの?」「これから先の進化が楽しみ」と、音楽文化への関心が広がった感想も見られたことから、この先の学びへとつながっていく学習内容だったと捉えられる。

(5) パフォーマンス課題の設計と実際

池田(2001)は、小学校での実践経験から「“自分でよいと思う方法で音を出せばよい”のですからさまざまな工夫ができ」、「常に新しい発想の手助けをしてくれる」、として「環楽器」を提唱している。この「環楽器」を中学生向けに教材化し、これまでのモジュール学習で広がった音や音楽への概念理解を、音や音楽を介したコミュニケーションや自己評価を通したメタ認知的活動のパフォーマンスとして教材化した。この課題によるパフォーマンスを手がかりにすることで、生徒の音や音楽に対する総合的な活用力の質的な評価を行うことをねらい、身の周りから「環楽器」を探し出し、その魅力をプレゼンテーションする課題をパフォーマンス課題として設計した。

【上図】筆箱の中の筆記用具を「環楽器」として演奏する様子



プレゼンテーションでは、それぞれの環楽器の個性をよりよく伝えようと、言語表現の工夫だけでなく、音を通して他の素材や奏法との比較を示したり、アンサンブル演奏を実際に披露したりするパフォーマンスの工夫が見られた。しかし、言語表現に偏重する傾向はどの生徒にも見られ、そのためにプレゼンテーションの技術のみ着目していたり、環楽器の音色をよりよく伝えるための工夫へと繋がっていなかったりする様子が見られた。本来のカリキュラムでは、「環楽器」のモジュール学習は2年生で行うものであるが、言語によるメタ認知や音や音楽に対する批評による考えの形成をねらった、言語表現を交えたパフォーマンス課題と、後述する「音日記」のような、音や音楽だけの表現を求められる課題を系統的に設定することは、生徒により深い学びを提供でき、教科の本質に迫ることができるかと実感できた。

(6) 今後の実践予定

9年間の音楽の授業のまとめとして、「音日記をつくらう」というパフォーマンス課題を課すことで、教科の本質に迫る学びを実現したいと考えている。この「音日記をつくらう」という課題は、義務教育を修了する今の自分の周りにある音や音楽に価値を見出し、録音や演奏などの1分間の表現活動と、その意義を伝えるための配付資料を作成する活動を予定している。さらに、級友の発表を批判する活動を通して、メタ認知的に自分の音環境を見つめるとともに、主体的に音や音楽の価値を捉え直させ、卒業後の生活へとつなげさせたい。

7 実践の考察と課題

(1) ルーブリック評価結果からの分析と考察

パフォーマンス課題に取り組んだ88名(3学級)を分析対象とし、記述語による評価と合わせて、各項目を達成している人数や割合からも分析を行う。資料7は、ルーブリック表による各項目の評価件数をまとめたものである。

まず、「3音環境をよくするための創意工夫、音楽表現の創造」の項目に当てはまるのが62人(70.4%)、

資料7

項目	発表内容と記述内容	(件)
1	音や音楽に対する、概念の広がりが見られる記述がある。	37
2	発表内で、言葉と音楽を組み合わせで紹介している。	45
3	1つの環楽器で2種類以上の音を紹介したり、その環楽器の特性を音の比較で紹介したりしている。	62
4	環楽器から生まれる音色を感受し、言語化したりしてその良さを伝えることができる。	54
5	アンサンブルを環楽器の魅力の一部として紹介・実演する。	66
6	これからの生活に学びを生かそうとする発言や記述がある。	19

「5 協働的に楽しむ、音や音楽のある生活への親しみ」の項目に当てはまるのが66人(75%)と、共に7割を超えた。これは、パフォーマンス課題に取り組む以前から、モジュール学習として、グループで音や音楽を使った表現活動を定期的に行い、知識や技能を活用しながら、協働的に音や音楽を楽しんできたことによる成果と言える。年度初めのアンケート分析では、創意工夫に対する抵抗を感じる生徒が多くいたことから、モジュール学習により、音や音楽を介在させた自己表現に対する親しみをより高められたのではないかと考える。(資料8参照)

資料8

「環楽器の活動を通して、新しく気付いたことを書いてください。」記述内容

アンケートの記述内容	(件)
新しい音を見つけたり、演奏表現の多様性に気付いたりすることができた。	57
おもしろさを感じたり、「いいな」と思える音を見つけられたりした。	16
音の使い方や組み合わせ方を新しく知ることができた。	11
音の個性を聴き取ることができた。	7
もっと身の周りの音を聴こうと思った。	2

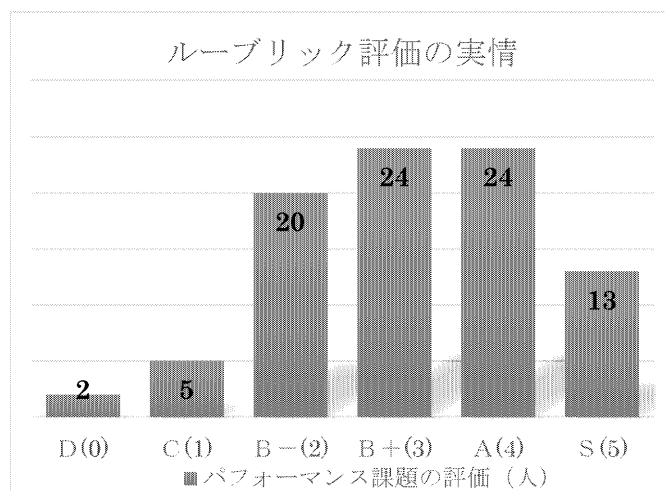
「2 音や声による自分のイメージの表現」の項目に当てはまるのが45人(51.1%)、「4 音環境の解釈・評価、自らの意志の選択」の項目に当てはまるのが54人(61.3%)と、共に5割を超えた。このことから、先述した成果が技能や鑑賞能力の高まりに支えられたものであると解釈できる。また、「自分チェック」を分析してみても、1学期中に行った同様の表現活動と比べて、「創意工夫」「理解」の項目において大幅な高揚が見られたことから、批評のための根拠の拠り所や、活動に対する自分にとっての意味や価値を見出すことができるようになったと考えられる。

一方、「1 音楽の多様性と背景の理解」の項目に当てはまるのは37人(42%)に留まった。提示された音に対して、これまでの経験や既存の楽器の構造を結び付けることができなかつたのは、プレゼンテーションという新しい手法に取り組むことに精一杯で、これまでの音楽的学びを想起させる余裕がなかつたからだと考える。そこで、複数学年に渡ってのモジュール学習として設計することで、より広い知識を使える活動になるようにしていきたい。

また、「6 人間にとっての音や音楽の存在意義、よりよい音環境の希求」の項目に当てはまるのは19人(21.5%)であった。1・2学期のモジュール学習で、音や音楽と生活との結び付きを改めて認知した生徒は多く見られたが、その気付きをこの先の生活につなげようという意識までは高まっていないと考えられる。この点にこそ、三年間で積み上げるモジュール学習が

有効だと考えられるため、引き続き実践を継続し、分析したい。

資料9



さらに、記述語による評価レベルの分布を分析してみると、年度当初に比べてA(4)、S(5)の割合が大きく増加したことから、モジュール学習による音環境への学びの深まりが実証できたと考えられる(資料9参照)。

(2) 2学期末アンケート結果の分析と考察

生徒の変容を見取るため、年度初めに行った6件法アンケートと同様のものを行った。2回のアンケート結果をグラフとしてまとめたものが資料10である。

すべての項目の数値が上昇し、特に音や音楽に対して高い価値をもっている生徒が100%に達した。これは、教師が目指す生徒像を明確にもち、それを支える学びを実現するための学習カリキュラムを的確に選択・配列することが、さまざまな学びのレベルにある中学生にとっては、大きな教育効果があることが分かった。

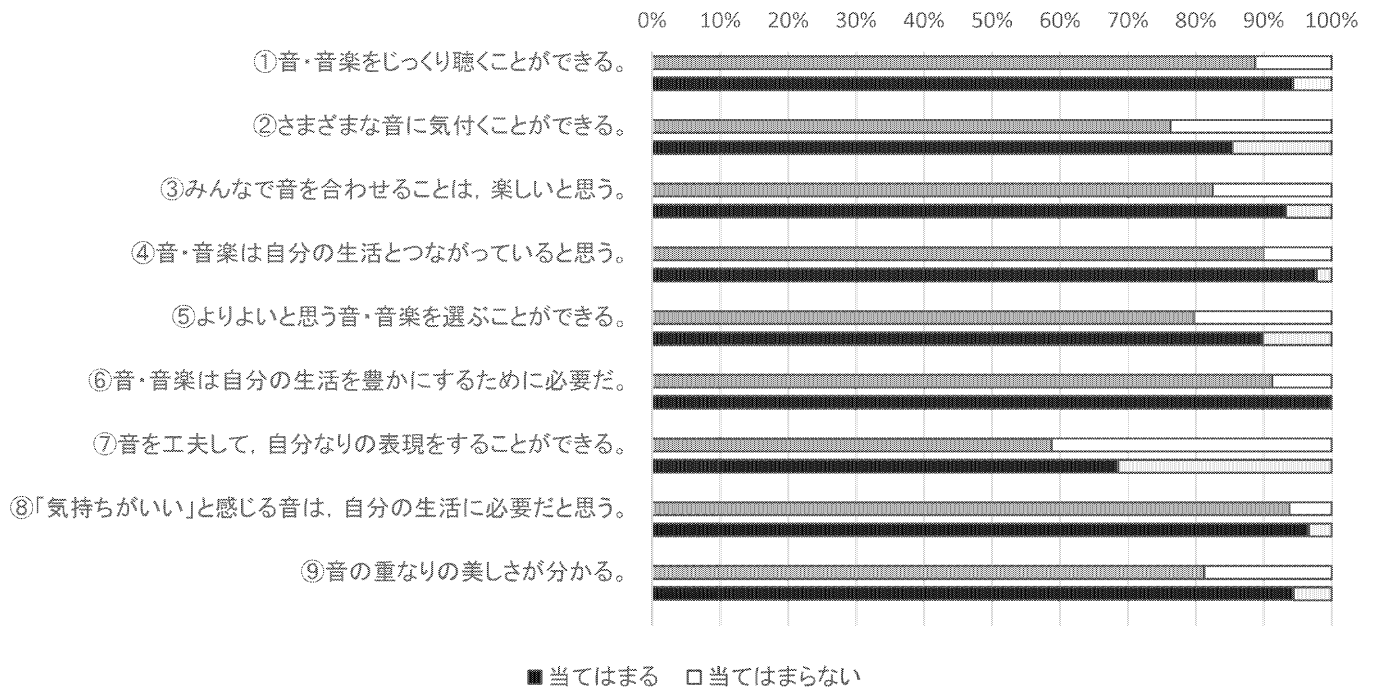
また、音や音楽に対する批評力が高まったと感じる生徒の増加率が、全学年中最も高かった。記述式のアンケートの文章も、形容詞の増加など、音や音楽に対する言語能力の高まりが見られたことから、本実践を通して、生徒の音や音楽に対する批評・評価する力が高まったことが分かる。

さらに、音の重なり的美しさが分かることと答えた学習者も、全学年中最も増加したことから、さまざまな音や音楽に触れる機会を確保できる学習カリキュラムを構築することで、音に対する感性の高まりが期待できることが改めて実感できた。このことから、音楽の授業においては、生徒にとってアウトプットである歌唱や器楽と、インプットである鑑賞、さらにその両者を合わせて思考・判断を必要とする創作のすべての活動を取り入れた上で、ジャンルが偏らないように教材を選択することが重要であると言える。

環楽器の活動に対するアンケート記述内容を分析

3年生実践結果(上:実践前 下:実践後)

資料 10



してみると、自らの音環境を再認識したり、音や音楽に対する概念の広がりを実感したりしているだけでなく、創意工夫することや思考を伴った活動への価値が高まった様子が見られた。

(3) 他学年との比較分析

研究年度は並行して1・2年生もモジュール学習の試行実践を行っている。

2年生においては、現状に合わせて計画を組み直したものを活用しているが、どうしても表現活動に偏重してしまっていた。実践後のアンケートを見ると、協働的に音や音楽を楽しむことに対して価値を見出す生徒は増加したものの、他学年に比べて増加率が低い項目が多かった。

1年生においては、1学期末のアンケート項目の数値がすべて上昇したことから、モジュール学習を通して音環境への意識の高まりを実現できたと実証できた。しかしながら、2学期末では、2年生とは逆に、協働的な活動に対する項目の数値が減少した。これは、メタ認知的な客観性が高まる発達段階に入ったことで表現活動に対する認知が再構築されていることが影響していると考えられる(資料11参照)。

これらのことから、モジュール学習においての、学習内容を的確に選択・配列することの重要性が、より明らかとなった。

まとめにかえて

今回の実践の大きな成果は、既成の概念を超えて音楽表現と音楽受容を楽しめる生徒が増えたことであろう。本研究は、授業の学習と生活の中の音や音楽を関連付けられる生徒の育成を目指しているが、そもそも

資料 11

アンケート項目に対して「当てはまる」と回答した割合

質問項目	1年		2年		3年	
	年度初め	2学期末	年度初め	2学期末	年度初め	2学期末
①	91	96	97	96	88	93
②	75	80	77	85	76	85
③	91	89	77	93	82	93
④	89	95	80	90	90	97
⑤	79	90	81	82	78	89
⑥	82	95	81	89	91	100
⑦	54	75	56	60	58	68
⑧	85	95	86	90	93	96
⑨	79	85	77	84	81	94

(%)

音や音楽を楽しんだり、身近に感じられたりしなければ、耳は閉ざされ、学びや気付きは到底得られない。本モジュール学習の設定により、耳を開かせ、音や音楽を脳でじっくり味わうための学びに向かう力を高めることが実証できたことで、これからの音楽教育に新たな意義を見出したとも言えよう。また、モジュール学習を組み込んだ授業を重ねることで、生徒の多様な発言が増えただけでなく、音や音楽を介在させて級友とよりよい表現を実現しようとする生徒も増えた。これは、本研究が協働的な学びの広がりの実現に有効であることを示している。

なお、現行指導要領には、「適宜、自然音や環境音などについても取り扱い、音環境への関心を高めたり、音や音楽が生活に果たす役割を考えさせたりするなど、生徒が音や音楽と生活や社会との関わりを実感できるような指導を工夫すること。〔2 内容の取扱いと指導上の配慮事項(7)イ〕」と示されており、それに続く解説文には「『自然音や環境音』とは、風の音、川の

平成31年度 音楽科

月	4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月			1月			2月			3月										
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
モジュール学習 (1年)	目標	身近な音を注意深く聴く。(1)			音を聴き分け、(2)			音を聴き分け、(2)			音探の持つリズムの組み合わせを楽しむ。(2)			民謡のリズムや音色を楽しむ。(2)			偶然性の音楽を楽しむ。(2)			音を記憶する。(3)			探りのリズムや音色を探す。(4)			音の概念を広げる。(2)			自然の様子を音楽で表す。(4)															
	活動内容	耳をすましてみよう			身体の中の音を聴く			周波数別の音を聴く			心でどこゲーム			紙を楽器にする			しりとり作曲			「小さな祭り」合奏			イスとり作曲			音と一緒に走る			音をちぎる			なんちゃって祭り			なんちゃって祭り			ペーパー・コンチェルト等			季節の音で自然を表そう			
モジュール学習 (2年)	目標	身近な音を注意深く聴く。(1)			木の音とリズムを楽しむ。(4)			メロディやリズムの韻なを楽しむ。(4)			日本の音環境(3)			音を記憶する。(5)			身近な楽器を見つける。(2)			音を生み出す(4)																								
	活動内容	耳をすましてみよう			音にくっついてみよう			マリンバ・アンサンブル			なんちゃってフーガ			日本の音環境目録			名前を覚える			音をちぎる			「環境器」を探す			絵から音を思い浮かべる																		
モジュール学習 (3年)	目標	身近な音を注意深く聴く。(1)			徐々に変化するグラデーション音楽を体験する。(4)			日本の音の楽しみ方(2)			ゲーム音楽について考える。(2)			現実にはない音に気づく。(3)			循環コードとアドリブを体験する。(3)			自分の音環境について(5)																								
	活動内容	耳をすましてみよう			階段の音を聴く			息のかくれんぼ			手拍子の Rond			風鈴・器楽・鍵盤・録音			「ドラゴンクエスト」「風のリフレット」			冷たい音とお湯の音花びらがゆくりの音			「香を聴く」「茶の湯の音」			「6つのコード」			聖ヨハネホスピス			「音日記をつくらう」												

せせらぎ、動物の鳴き声、機械の動く音など、生活や社会の中に存在する様々な音を指す。人間は身の回りの様々な音に耳を傾けて、そこに意味を見いだしてきた。生徒が音を意識して聴き、その音が人々にどのような影響を与えているのかを考えたり、よりよい音環境の在り方への関心を高めたりすることは意味のあることと言える。音楽科の学習において、自然音や環境音、さらには、音環境への関心を高めることは、人間にとっての音や音楽の存在意義について考えたり、生活や社会におけるよりよい音環境を希求する意識をもったりすることへとつながっていく。指導に当たっては、自然音や環境音を意識して聴き、心地よさや不快な感じ、静寂や騒々しさといった生活の様々な場面での音環境を考えるなどして、生徒が、音や音楽と生活や社会との関わりを実感できるように配慮することが大切である。」とある。これらのことから、本研究は、これまで中学校段階であまり重要視されてこなかった音環境の教育に対しての意義ある提案と捉えることができよう。

本研究の性格上、今年度の実践だけでは十分な検証が難しいため、教職大学院修了後も実践を継続し、検証していくことで、本研究の意義を追求していきたい。最後に、本研究の考察を踏まえて改訂した平成31年度年間計画を資料12として掲載する。

主要な参考文献

1 文部科学省・学習指導要領等

- (1)『中学校学習指導要領解説 音楽編』(文部科学省、2017、p.6-20)
- (2)『中学校学習指導要領解説 音楽編』(文部科学省、2008、p.66)
- (3)教育課程部会芸術WG資料3-1「小・中・高を通じ、音楽科、芸術科(音楽)において育成すべき資質・能力の整理(検討のたたき台)」(平成28年2月23日)

2 音楽教育理論関連

- (1)R.マリー・シェーファー『世界の調律ーサウンドスケープとはなにか』(平凡社、1986)

- (2)R.マリー・シェーファー『教室の扉』(全音楽譜出版社、1980)

3 音楽教育実践研究関連

- (1)R.マリー・シェーファー、鳥越けい子、若尾裕、今田匡彦『サウンド・エデュケーション』(春秋社、1992)
- (2)R.マリー・シェーファー、今田匡彦『音さがしの本リトル・サウンド・エデュケーション』(春秋社、1996)
- (3)野村 誠、片岡祐介『ミュージシャンが作った音楽の教科書 音楽ってどうやるの』(あおぞら音楽社、2008)
- (4)ヨイサの会『授業にすぐ役立つ! 「音」を「楽」しむ「音楽」の旅 「聴く」「つくる」で心を育てる』(音楽之友社、2001、p.82)

4 教育課程・学習評価関連

- (1)新山王政和、市江真理子、小出真規子、長岡知里「文部科学省学習指導要領改訂の動向と音楽科をめぐる議論の整理ー対応例としての小学校音楽科『短時間学習』の提案と合わせてー」(愛知教育大学研究報告第66輯(芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編)pp.1~9 [別刷]、2017)
- (2)佐藤洋一、森 和久、有田弘樹「国語科におけるアクティブ・ラーニングの開発と課題ー質の高い深い学びにつなげる活用型テキストー」(愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 vol.1 pp.35~42、2016)
- (3)西岡加名恵、石井英真、田中耕治『新しい教育評価入門ー人を育てる評価のために』(有斐閣コンパクト、2015)
- (4)奈須正裕『「資質・能力」と学びのメカニズム』(東洋館出版社、2017)
- (5)石井英真『今求められる学力と学びとはーコンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影ー』(日本標準、2015、p.68)

5 音と音楽をめぐる文献

- (1)山岸美穂、山岸 健『音の風景とは何か サウンドスケープの社会誌』(NHK ブックス、1999)
- (2)小沼純一『音楽に自然を聴く』(平凡社、2016)
- (3)山崎章郎『ホスピスの「質」 生の声』(講談社、2001)